

# 『月刊みんぱく』の過去・現在、そして未来

一九七七年一〇月に第一号が産声をあげ、この一一月でちょうど三〇巻を達成した。

節目にあたり、歴代編集長に本誌の存在意義や編集のエピソード、継続のための苦労などについて語ってもらつた。過去を顧みると同時に、現在を検証することで、『月刊みんぱく』の未来への展望を探つてみたい。

**池谷** まずは今から三〇年前、どういう形でこの雑誌は生まれたのでしょうか。

**石毛** 民博がオープンするころはものすごく忙しく、今より教官の数は少くないし、全員が展示の作業にとりかかっていました。そこへもつてきて開館にあわせて図録を出さなければならない。わたしはその図録の編集長格でかかりきり。そのほかに千里文化財団の「友の会」が組織され、『季刊民族学』や『民博通信』も出すと。そこへ梅棹忠夫館長が『月刊みんぱく』というアイデアを出したわけです。当時、編集の経験がある人ってほとんどいなかつたんですね。わたしは『季刊人類学』の編集長みたいなことをやつたり、本も何冊か編集したりしていったから、広報のこともわかるだろうと。それで、任されたわけです。

そしてこれを長続きさせるにはどうしたらいいか考え、表紙の口ごとや、写真は展示物の部分的な拡大と全体というパターンでいくことなどを全部決めたわけです。そのパターンはマンネリといわれようが、少なくとも三、四年は続けよう。

**池谷** そうして第一号ができあがつたのですね。

ですから、新聞社だと、そういうところへは送るようになつたのです。

**池谷** 開館の準備もあり、ご苦労なさつたでしょう。

**石毛** 第一号を出すまでが大変でした。わたしはオセアニア展示の全体のチーフだった。しかも展示作業と並行しながら図録も作っていたので、とにかく第一号を出すまでは忙しかつた。

**池谷** 表紙に初めてモノを選んだ方法が、ほぼ三〇年間続いていますよね。

**石毛** その当時、わたしが図録の編集長みたいなことをやつていて、たくさんの写真を撮つていたんです。それを使っていくことに決めました。

**池谷** 民博は博物館なので、モノが基本。そういう理念のようなものがあつたのですか。

**石毛** それもあつたかもしれないけれど、いちばん効率的な方法だったのです。

## 広がる筆者の輪、読者の輪



1977年10月～1981年3月 編集長  
石毛 直道 (いしげなおみち)  
本館名誉教授



2006年4月～現在 編集長  
池谷 和信 (いけや かずのぶ)  
本館民族社会研究部

**野村** 表紙に収載品を細部拡大して載せるというのは、かなり斬新なことだつたんじゃないかと思いますね。

**石毛** 表紙裏のページに全体写真と解説があり、「ページ目は『みんぱく・えつせい』」。著名人のちょっとしたエッセイです。第一号の館長対談が小松左京さんでした。それから教官によるエッセイには、わたしが見本として「よほい棒」というのを書きました。

**池谷** 石毛先生のおつしやつたフォーマットが今でも続いているところもありますね。

**石毛** 当時は企業のPR誌、それもあまり商品の宣伝ではないものが大盛盛んだったところで、そういうふうなのはカラーをよく使って人目を引きつけるけれども、うちはその予算がない。だけど真っ黒な誌面というのはどうも…。それで二色刷りにしました。



**池谷** 非常に新しい体制を作つたといふことですか。

**石毛** 例えればイベントのお知らせをするにしろ、お役所的な触れ書き式のものをお役人さんたちが考えるけれど、「出しをするなど」というような。

**池谷** あらたな歴史を歩む最初のひとつが広報誌なら、無料で配布するとか駅に置くような体制をとるのが普通だと思うんです。しかし「友の会」には販売するが一般には売らないという、特殊な状況を作りましたね。

**石毛** 民博へ来たらもちろん買えるけどね。本屋で売れないか考えたことがあるんですが、まだ民博ができる前で、そんな無名のところを取次店が相手にしてくれるはずがない。むしろ「友の会」の会員を中心とした配布方法のほうがいいと思いました。それから、ジャーナリズム



1994年5月～1998年12月／2004年4～6月 編集長  
野村 雅一 (のむら まさいち)  
京都外国语大学教授  
本館名誉教授

編集する教官たちがもつ、と。これは一種の言論の自由みたいなもので、教官に一切の判断をゆだねる。それを確立するのが大変でした。

**池谷** 非常に新しい体制を作つたといふことですか。

**石毛** 例えればイベントのお知らせをするにしろ、お役所的な觸れ書き式のものをお役人さんたちが考えるけれど、「出しをするなど」というような。

**池谷** あらたな歴史を歩む最初のひとつが広報誌なら、無料で配布するとか駅に置くような体制をとるのが普通だと思うんです。しかし「友の会」には販売するが一般には売らないという、特殊な状況を作りましたね。

**石毛** 民博へ来たらもちろん買えるけどね。本屋で売れないか考えたことがあるんですが、まだ民博ができる前で、そんな無名のところを取次店が相手にしてくれるはずがない。むしろ「友の会」の会員を中心とした配布方法のほうがいいと思いました。それから、ジャーナリズム

ばいけない。編集をやつたら、人の文章に手を入れたりするので、それがもの書きのトレーニングとしていいですね。

**池谷** それは感じますね。さらに文化人類学の研究者ではない千里文化財団の方々が一緒にやつてくれたので、わかりやすさを厳しく追求できるシステムができたようになります。

**石毛** もうひとつは、ジャーナリストイックなセンスを養うことができる。この欄には誰のどんなものを載せたらおもしろいかとか、考えなきやならないでしょう。

**池谷** 今でもいちばん大事なことです。誰に書いてもひつたら期待どおりの効果をえられるのか、毎回頭をいためています。

**野村** 制作には外部の人が加わっているほうがいいですよ。研究者だけでやつていたんでは、編集も制作もうまくいかないとと思う。

**池谷** 三〇巻のうちの前半は安定した状態が続き、「月刊みんぱく」は広報誌として非常に順調だった感じを受けますが、問題点もあったのでしょうか。

**野村** やはりずっと続けているとマンネリになってしまいます。この雑誌は最初からかなり完成されているんですね。第一号から読みこたえがあるといわれてきました。

**池谷** しかしうまくいってるから続けたいっていうものじゃなくて、うまくいっているうちに変えたほうがいいと思っていた。うまくいってるからもつたないじやな

と思っていた。失敗しててもいいから変える。それで、まず表紙の口

「」を変えようとした。

**池谷** これを変えなければならないという背景には、やっぱりマンネリ化があつたんですか?

**野村** 同じ体裁でずっと来ていました。表紙も収蔵物、収蔵品の細部のデザインで来たんです。趣をとにかく変えようというので迷いながら、いろいろな人に相談しました。すると最初の「みんぱく」の字体がやっぱり

池谷 遠足などで来られる学校の生徒数は、入館者数として大きな数字になっていますね。

**野村** 近隣の小・中学校にかなりの部数を送ったようですが、小学生には難しき過ぎる。中学生にも難しき過ぎる。だから、まず先生に読んでもらって、授業のなかで紹介してもらつたら、ということだったらしいですけれど…。

**池谷** 誰が読んでくれるか、というのを想定してフォームを変えるということはなかつたわけですね。

**野村** だから、いまここは大人の雑誌で、わかりやすくとも、小・中学生には最初から無理だと思いません。

**石毛** 開館当時の民博の展示の解説は、中学生にわかるようにといつ方針だつたけれど、実際、中学生には文章としてはわかつても、その背景など、いろんなことを知つていないと、やっぱり理解しにくい。それと似ていますね。

## 法人化による変革

**池谷** 野村先生の編集長時代というのは二回あつて、一回目は安定していたけれども、少しづつ変わる兆しが見えた時代です。二回目は二〇〇〇四年で、この三〇年間でいちばん大きかつたのではないでしようか。このときに法人化という民博の改革がありました。そして『月刊みんぱく』も表紙からがらつと変わつた。特に表紙に太陽の塔が登場して、衝撃があつたと思うんです。

**野村** これは徹底的に全部変えるといつ話で、準備を進めました。それまで民博が編集し、千里文化財団が発行する形でしたが、経緯は知りませんが、法人に入れるから、民博が発行するといつ話になつたのです。

**池谷** それによつて、すべてが変わつたんですね。

**野村** そうです。当初は市販もしたい、広告もどんどん入れたいということでした。それでわたしのところに、

池谷 それによつて、すべてが変わつたんですね。

長いこと編集長をしていましたから、またお願いしたい、と依頼が来たんです。実際、直接かかわつたのは二〇〇四年四月～六月号の三号ですが、半年以上前から準備をしました。市販するなら紙も変わっていきます。それまでのコピーしたら裏が写るようなもので、今の時代、これではちょっと貧乏くさいかなと思つて変えました。紙質については、最初わりとお金のことを考えた。安くて二色に何とか耐えるものと。お金があつたらもうといふといのを使つたのですよ。やはり紙質を変え、現代風の雑誌になつた(笑)。

**野村** ちょっと古びたのが一挙にイメージが変わりましたよね。それに市販なら背表紙があるほうがいいといふので、広告を入れて背表紙もつけることを考えました。雑誌としてはそのほうがおもしろいし、メリハリもできる。ページをめくる楽しさがあるから。それなら広告を入れようということで準備していました。しかし残念ながら、いろんな制約がありまして、市販ができなくなりました。広告も入れられないとか、広告をとつてもそれがどの部局の収入になるのかわからないという話になつた。これは民博の内部といつよりも、結局法人化の法制的な規制でそつうなつたと聞いています。

**池谷** それと編集長の期間も変わりました。以前のよう

に、ひとりの編集長が何年も続けられなくなりました。が変わつた。今、池谷編集長でも変わつてきましたよね。

今やつている経験でいうと、毎号の特集の企画など負担が教官に全部かかつてくるという問題もありま

す。特集が始まつてまだ三年しか経つていませんので試行錯誤の時期だと思いますが、今後を考えると、これがいちばんいいのかどうか…。

**野村** 特集方式というの、もともと梅棹先生は好きじやなかつたでしよう。特集の原稿というのは全部が全部

いいものがそろうとは限らないので、なかなか難しい。それでも少しだけ文章できちんと書けるようにすること大切だと思います。

誌は自由にいろいろあつたほうがいいといつ考えです。市販の雑誌だと、特集のテーマによつて売れ行きが変わつちやうくらい重要なになつてくる。

**石毛** そうですね。一方で、雑誌は継続性が問われるのですが、いい連載がないと雑誌になりません。そのためにも、いい連載を作る。そこに特集がプラスされる。

**池谷** 今は連載ものはわりと短く、読みやすくするよう心がけていますが、どう思われますか。

**野村** 研究者つて、いろんなことを知つているから、原稿はいくらでも長くなる。短くするといつのはとても難しくて、みんな苦労するでしよう。依頼したら大抵長くなる。縮めてもらうのに苦労するので、最初から短く短くといつておかないといけない。原稿は短いほうが絶対読まれるんですよ。だから『月刊みんぱく』も読み手からしたら今はすごく楽しめる雑誌になつていてると思います。でも、ひとつだけ注文させていただくと、書き手のことを、少し考えてあげたほうがいいんじゃないと思つてます。

**石毛** 短い文章といつのは本当に難しいし、たとえば新聞に「ラムを連載するでしよう。週一回でも一年で五〇回ぐらゐになります。そのくらい書いても、一冊の本にはならないんですよ。

**池谷** 刊行の当初では対談、そしてインタビュー、特集が続くのですが、フィールド・エッセイも根強く続いています。現場に行つてエッセイを書けるといつ、これはひとつの確固たる時代を超えた伝統のよつた氣がします。その意味では、やはり三ページぐらい必要ですね。今でも最後のところが「フィールドで考える」というエッセイになつていて、こういつところがちゃんと書けるといつのは大切です。今、ちよつと写真に過重しているので、もう少し文章できちんと書けるようにすること大切だと思います。

**野村** 何かまとまつたことを書いたといつ気になれるくらいの原稿のスペースも必要です。最初から短いもの

で来るのに相当長い時間が経つていて、新装された号が出たのは一九九九年四月で、すでに編集長は僕から栗本さん(現・大阪大学)に変わつていました。

**石毛** パーティー化すると制作が楽になるだけじゃなく、読者がそのパーティーに慣れて安心する。だから、少なくとも三、四年は続けようと当初は思つたんだけれど、こんなに長続きするとは考えていませんでした(笑)。

**野村** それだけ完成度が高かつたといつことでしよう。ページとかウェブサイトもほとんど利用されていなかつたわけですから。

**池谷** 当時、この雑誌を月刊誌として続けるべきかといつ議論はありましたか。

**野村** それについては議論はまつたくなかつたです。民博の刊行物のなかで、いちばん広く読まれていたし、新聞、雑誌でもよく『月刊みんぱく』の話が引用されたり、紹介されたりしたので、実際かなり読んでもらつていました。どうしようもないという感じでした。今のようにホームページとかウェブサイトもほとんど利用されていなかつたわけですから。

**池谷** 石毛館長時代に、特に博学連携といって、小学校、中学校の先生の総合学習と連携する。それで、小長谷編集長の時代に、『月刊みんぱく』を「友の会」の会員だけではなく、小・中学校に大量に送り出した時期があります。館の方針としてはもっとPRしたいというのもあるの

でしょうか。また、「友の会」の会員が減少傾向にあり、危機の時代であつたのかなとも思つてゐるのですが、そのへんは何か背景があつたのでしようか。

**石毛** 総合学習だと、いろんなことがいわれながら、一方では法人化になるといつことがいわれながら、一方では法人化になるといつことがありました。そういう方では、子どもたちから民博を知つているといつ人が増えたりいいなど。また、ヨーロッパでは学校の授業で先生が生徒を博物館に連れて來ていています。民博もそうなれば入館者が増えていいと思つたこともあります。



ばかり要求するのはちょっと酷かななど。

**池谷** その点は考えなければいけないと思つています。特集についてはむかしとは全然違うテーマをできるだけ現代社会との接点で編集していきたいと考えています。

**石毛** それは大変結構なことだと思います。

今のカラーを使ったグラフィックのレイアウトも、これだったら企業のPR誌にしても遜色ない。それで中身もがつちりしている。「月刊みんぱく」の将来の目標としては、これだけのものを、もっと世のなかの人に読んでもらつゝと同じではないですか。何とかうまく市販できないかなと思うんです。

**野村** わたしが最初に編集長をしていた一時期、東京の三省堂や大阪の旭屋に置いてもらつていたんですよ。三省堂では一ヶ月に三冊ぐらい売れていた。背表紙すらない雑誌をわざわざ探しめて買つてくれるというのは、すごいことですよ。三省堂の雑誌コーナーのところに『月刊みんぱく』とタイトルが出ていたから、あるのはわかるんだけれど、平積みはしていない。それを探して買ってくれるという人は、よほど奇特性ではないか。だから、買つてくれた人は一〇〇人分ぐらいの読者の値打ちがあると思うんです。手にとつてお金を払つて買つてくれる人がちょっとでもいるというのはすごく意味があるし、書くほうにとつても書きがいがありますよ。

**石毛** ただ、販売というのは、ある面倒ももつていています。売るようになつたら必ず売れ行きが心配になる。そのため売れるように書かなきやならない。すると、プロのもの書きとは違つ人ひとの本当に伝えたいことが、商業主義によつて曲げられるということが出でくる。そのへんをうまいことできるようになるのが、ほんまの学者であり、もの書きでもあります。



乗車の待ち時間に  
フリーペーパーを  
手にする



インターネットは普及し  
駅にも端末が置いてある

いうことがしきりにいわれるのだけれど、原稿依頼をすることでの人の輪を作つていく、つないでいくという意味で研究者以外の人にも加わつてもらつたほうがいいと思う。

**池谷** そのへんはNGO

やNPOとか、いろんな活動家が書き手におられます。

**石毛** そして、民族学なし文化人類学というのは何でもできるんだと、しめしていかなければならない。

**池谷** そのことについては厳しい時代になつているともいえるわけですね。

**石毛** たしかに大変ドラスティックな時代だけど、それはそれで今までのスタイルをずっと続けるというのは、あと五〇年やるんだつたら意味がある。偉大なるマンネリといえる。でも、こういった読者あつてのものは、そのときどきに変化するるのは当たり前のことです。

この雑誌を三五〇冊すべて並べるとすごいでしょうね。

例えば、「友の会」の会員さんが全部ついていたらみんな財産だと思います。

**野村** 財産といえば雑誌の二次利用ですよね。Q&Aは、河出書房新社から出した『100問100答 世界の民族族』と『100問100答 世界の民族生活百科』にまと

められ、二次利用として他にも何冊か出ますよ。『100問100答 世界の民族』の続編で出ています。最初の本は台湾で『世界の民族』(晨星出版、2000年)として中国語訳が出されている。ある程度国際的な評価もえています。

**池谷** もう少し二次利用を増やす努力が必要ですね。ずっと続けて本誌の「生きもの博物誌」は、すでに出版されていますし、今後どう作るかがひとつ課題です。

**野村** それをやろうとしたら細切れ原稿はね…。ある程度まとまとしたものじゃないと本にならない。でも、原本を作るための雑誌じゃないんだから、雑誌は雑誌という考え方もあるつとしたら細切れ原稿はね…。ある程度まとまとしたものじゃないと本にならない。でも、原本を作るための雑誌じゃないんだから、雑誌は雑誌といふ考え方もあつて、そのへんは難しいですよ。

**池谷** 一年か二年前に『月刊みんぱく』の存続について議論がありまして、隔月刊にしたほうがいいという意見が出たり、もうやめてしまえとか、無料化してホームページで見られるようにするとかありました。わたしとしてもこれは非常に難しいテーマで、とりあえず三〇巻を達成した段階で、どういう時代が見えてくるのか考えようと思つています。非常に未知なる領域なのです。

**石毛** 面倒なことはあるかもしれないが、伝統として研究者が編集してきたわけです。研究者にとっても編集にたずさわることによって社会との接点、あるいは自分の文章の欠点だと、いろんな面で気づかされることが多くあります。そういう意義もやっぱり考えたほうがいいでしよう。必ずしも読者のためだけではないと。

それから、これが全部電子メディアでいかといつた話で、やっぱ当分そつはならないでしよう。紙はとつ

ておけるといつとんに大分意味があります。

**野村** しかし、三〇年近く続いてこれからを考えたとき、全部そろえていたらどれだけの値打ちがあるかという問題がひとつあります。僕が三年くらい前にふたたび集長をやつたときは、これをそろえてとつておくということは考えていかつたんです。石毛さんの意見とはちよつと違つんだけど、僕はリユースする時点で、雑誌は読んで捨てたらいもんだと思っていました。石毛先生や野村先生は最初からそういうかたちでされながらその先駆けみたいな形で、無料で町で配つて読んでもらう。それはひとつ的方法だと思います。フリーペーパーというのは広告が全面的に入つています。企業の



国立民族学博物館関連図書フェア  
ジュンク堂書店仙台店(2003年8月開催)

## 紙媒体としての存在意義

**池谷** この雑誌を無料で配布というのはあまり勧めないですか。

**野村** 今、世界的にはフリーペーパーが増えています。ヨーロッパでもアメリカでもそうですし、日本にもたくさんあるでしょう。おもに情報誌です。博物館がフリーペーパーを配布し、かかるべきところに置き、大勢の人間に読んでもらつことに関しては、財政的な問題もありますが、日本はむしろ遅れているほうだと思うんですよ。だからその先駆けみたいな形で、無料で町で配つて読んでもらう。それはひとつ的方法だと思います。しかし世のなかは広い選でないと、なかなかうまくかない。かつて、書き手は館内で全部そろつていたと思うんです。今はかなり日配りをしていろんな分野とクロスしていかないと、おもしろい研究もできないような時代になつていています。

石毛先生や野村先生は最初からそういうかたちでされただきましたが、今は逆に非常にたこつぱ化しているといふ、学問の姿勢があると思います。しかし世のなかは広いほうに目が向いているのだから、書き手を探すのが難しくなつてきています。

**野村** 何らかのかたちで民博とかかわっている人たちが書いているので、書き手についての問題は全然ないと私はいます。ただ、研究者ばかりが中心になるとちょっと狭くなる。民族学、人類学の研究者コミュニティで見ておけるといつとんに大分意味があります。

書いていたり、もうやめてしまえとか、無料化してホームページで見られるようにするとかありました。わたしとしてもこれは非常に難しいテーマで、とりあえず三〇巻を達成した段階で、どういう時代が見えてくるのか考えようと思つています。非常に未知なる領域なのです。

**石毛** 面倒なことはあるかもしれないが、伝統として研究者が編集してきたわけです。研究者にとっても編集にたずさわることによって社会との接点、あるいは自分の

文章の欠点だと、いろんな面で気づかされること多くあります。そういう意義もやっぱり考えたほうがいいでしよう。必ずしも読者のためだけではないと。

それから、これが全部電子メディアでいかといつた話で、やっぱ当分そつはならないでしよう。紙はとつ

協賛や広告で経費のめどがたつたら、民博や人類学のいろんな面の発展から考えてもフリーペーパーのほうがないんじゃないかなと思います。国民的なレベルでも有益なわけですから。

**石毛** ただ、フリーペーパーの場合は、大体は無差別にたくさん出す。そうすると巨大な部数を作らないと意味がない。むしろ、雑誌のかたちには残しながら、ホームペーージ上で流す。

**野村** でも、ホームページやウェブサイトと紙媒体の役割は違いますよね。ちょうどインターネットが世界的に盛んになつてきたのと同時に、今度は雑誌がフリーペーパーとして大量に流れようになつてきました。そこへ広告もどんどん入つてきて。やっぱり需要があるんですよ。さまざまメディアがあつても、雑誌の代替はできな活字は活字だと思う。そのあたりをどううまくやつていくかはちょっと難しい。

**池谷** そうですね。ところで雑誌を作るときわたしが感じているのは、特集で、必ずしも文化人類学だけの分野の人を集めてもうまくいかない。人文学というか広い視野で誰がいちばんおもしろいことをしているのかという人選でないと、なかなかうまくかない。かつて、書き手は

たさん出す。そうすると巨大な部数を作らないと意味がないんじゃないかなと思います。国民的なレベルでも有益なわけですから。